

## 天然魚に寄生するヒル

釣りをされる方や漁業者の方で冬から春先にかけて、右の写真のように魚体に黒っぽい変な虫が付いているのを見たことがないだろうか？遊泳中の魚群を見ても、海藻が付着しているようにしか見えず、魚を取り上げて初めてその異変に気づくことが多い。写真はボラであるが、他に県内海域ではスズキでも見ることがある。

この虫の正体は、魚類に寄生するウオビル科ヒル類の一種“ヒダビル”である。本種は、淡水、海水のいずれにも生息可能で、宿主特異性は強くない。実際、淡水魚ではコイ科、サケ科魚類から、海産魚ではスズキ科、アジ科、タイ科、ヒラメ科、フグ科、ボラ科等から本種の寄生が確認されている。大きさは数 cm から 10 数 cm で、体表、肛門付近、各鰭基部等魚体のあらゆる部位に寄生し吸血する。寄生数は1尾あたり数個体から多くて10個体程度である。

寄生によって魚が死ぬことはないが、若干の貧血は観察されている。本種の寄生が見られた場合、見た目の悪さや寄生部位の傷による商品価値の低下が問題となる。実験では、淡水浴は全く駆虫効果がなく、対処法として銅イオンによる治療法が有効とされているようであるが、現場では寄生したヒルを魚体から引き抜くしか手はない。しかし、多くの魚種で本種の寄生は、4～5月以降確認されなくなる。

では、どうして冬場にヒダビルはボラやスズキに寄生するのだろうか？はっきりしたことはまだ分かっていないが、ヒダビルは春の産卵を控えて、魚から吸血して栄養を蓄えていることが推測され



ボラの体表に寄生したヒダビル

る。ボラは海底の泥を食べるので、比較的海底に接する機会が多い。そのため、海底にいるヒダビルがボラに寄生しやすい状況にあると思われる。また、冬季の低水温や産卵後の体力低下で活性が低くなったスズキは、海底でじっとしており、そこへヒダビルが寄生するものと考えられる。このように、ヒダビルは、冬季に海底付近に生息する大型魚に寄生する傾向があるようだ。

一方、春以降、寄生は減少するが、ヒダビルが春季に産卵し、水温の上昇とともに死亡することで、魚体から脱落していくことが原因と推察される。

最後に、時々「ヒルが付いた魚は食べても大丈夫なの？」という問い合わせがあるが、付いたヒルを取り除けば生で食べても大丈夫である。

(開発利用室：泉川)